

2013年ブザンソンにおける FLE 研修参加報告

西岡 杏奈

はじめに

2013年8月12日から22日までフランスのブザンソン（Besançon）で開催された、外国語としてのフランス語教師、またはフランス語教師育成に携わる人たちを対象にした研修に参加した。

私の場合は、日本フランス語教育学会がフランス大使館の協力のもと、三月に東京で行われた4日間の研修に参加した際に、そこで大使館の方たちによる面接を受け、奨学金をいただいで参加というかたちだった。

このブザンソンでの研修では、世界中からフランス語教師が集まっていたので、それぞれの国の文化的背景、社会的背景を踏まえたうえでのさまざまなフランス語教育事情が垣間見られたのも大きな収穫の一つだったといえる。私が参加したのは2週間のプログラムで、他に一カ月の研修を受けている人たちもいて、そこへ合流するかたちとなった。

ブザンソンはフランシュ＝コンテ（Franche-Comté）地方にある街で、小さな街ではあるが、歴史としては軍事的に重要な役割を果たした場所であり、今でも川に囲まれた街の中心部は古い町並みが残る、過ごしやすい街だった。

研修を主催しているのは CLA（Centre de linguistique appliqué 応用言語学センター）という施設で語学学校として、世界中からフランス語を学ぼうとする人たちが集まっている。この CLA は外国語としてのフランス語教授法（FLE）の先駆的な施設としての歴史があり、併設のメディアセンターにはあらゆる FLE 関係の書籍、資料が網羅されているということだった。CLA の校舎では夏休みということもあり、多くの学生たちがここでフランス語を学んでいた。日本の大学生もたくさんいて、みんな楽しそうにフランスでの生活を送っていた。

教師のための研修は、街の中心部にあるフランシュ＝コンテ大学のキャンパスを借りるかたちで行われ

た。宿泊場所は大学寮とキッチン付きのホテルとの二か所があったが、日本からの参加者は全員ホテルの方に宿泊した。このホテルと大学寮は歩いて1分ほどの距離で、朝食は大学寮のカフェテリアにて無料で利用できるようになっている。ホテルから大学までは徒歩10～15分くらいの距離で、2013年の夏はトラム建設のための工事が街のいたるところで行われていたため、砂利道を歩くという困難な一面もあった。トラムが完成すれば交通事情も大きく変わるだろうし、街の景観も変わるだろう。

研修は8月12日からだったが、朝から始まるため前日に現地に入っておく必要があった。前日にホテルに着くと、大学寮の一角で説明してくれる人がいるので行って資料などを受け取るように、ということだったのでメディアセンターや食堂で見せるための学生証や、地図、授業に関する説明が書かれたパンフレットなどを受け取り、買い物する場所や郵便局の場所など日常生活に関する質問などをして、到着した日は終わった。翌日、朝から参加者が集まってオリエンテーションを受け、どのような流れで研修が進められるのかを聞き、早速事前に選択しておいた授業へ向かった。

研修に参加することが決まってから、大使館の方と何度かやり取りをするなかで、授業（モジュール module といわれるもの）の一覧から各自三つのモジュールを選んでみた。これは実際に一度参加してみて、もし変えたいと思えば変更できるということだった。研修生は毎日同じ3つのモジュールを8日間受講する。さらにアトリエとフォーラムとよばれるオプションの授業があり、これらも選択したうえで計6回の受講が必要になる。一時間目は8時半から始まり、一コマ90分で、一日にだいたい4コマ受けることになっている。

すべてのモジュールは、いかに外国語としてのフランス語を教えるか、という一貫したテーマがあるものの、その範囲は広く様々な視点からフランス語教授法というものを学べるようになっている。

第一日目の授業終了後には、国ごと、地域ごと（私

たちは日本と韓国の二国)に分けられ、各担当のチューターの先生とミーティングが設けられ、質問や不安なことなど、相談できる機会もあり、安心できる受け入れ体制がある研修だという印象を受けた。参加者は様々な地域から来ていて、私の覚えている限り、モロッコ、リビア、カタール、アンゴラ、アルジェリア、トルコ、スーダン、ドイツ、スペイン、モンテネグロ、クロアチア、インドネシア、韓国などの国々である。普段なかなか出会うことのない人たちとフランス語教育という共通点を通して意見交換ができて貴重な体験となった。

1. モジュールの内容

ここで2013年のモジュール(タイトルと担当講師名)を紹介する。

Module 1 (8 h 30–10 h 00)

- ・ Méthodologie du FOS (Français sur Objets Spécifiques) *C. Mallet*
- ・ Enseigner aux enfants et aux jeunes adolescents avec le multimédia *A. Shungu*
- ・ Phonétique et Pratiques de classe *M. L. Lions Olivieri*
- ・ Découvrir le français d'aujourd'hui *P. Richetto*
- ・ Enseigner la compétence culturelle *A. Cormanski*
- ・ Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit *C. Caujac*
- ・ Enseigner l'oral en classe de FLE avec Radio France internationale (RFI) *D. Gros*
- ・ Évaluer et remédier *L. Monsaco Donas*
- ・ Utiliser les ressources du multimédia en classe de FLE (public adolescents et adultes) *J-Y. Loiget*

Module 2 (10 h 30–12 h 00)

- ・ Dynamiser les pratiques de classe à l'oral *C. Mallet*
- ・ Animer sa classe et enrichir ses pratiques grâce au TNI *A. Shungu*
- ・ Pratiques de classe : enseigner dans une perspective actionnelle *M. L. Lions Olivieri*
- ・ Se perfectionner à l'oral *C. Collomb*
- ・ Enseigner avec les techniques dramatiques *A. Cormanski*
- ・ Apprendre et enseigner avec la chanson française *D. Roy*

- ・ Favoriser les pratiques ludiques et créatives en classe de FLE *D. Gros*
- ・ Concevoir et animer des séances de FLE pour enfants *L. Monsaco Donas*

Module 3 (13 h 30–15 h)

- ・ Apprendre et enseigner la grammaire en classe de FLE *P. Richetto*
- ・ Concevoir des scénarios pédagogiques communic' actionnelle grâce au web 2.0 *A. Shungu*
- ・ Motiver les ados à travers une pédagogie active *M. L. Lions Olivieri*
- ・ Enseigner la langue et la culture par la publicité *A. Cormanski*
- ・ Enseigner le socioculturel à travers l'humour *D. Roy*
- ・ Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe de FLE *L. Monsaco Donas*
- ・ Créer des activités sur Internet *J-Y. Loiget*

モジュールの他に、アトリエと呼ばれる4日間連続の授業と、フォーラムと呼ばれる一回完結の授業から合計6コマ分取らなければならない。

ここにアトリエとフォーラムを紹介する。

Atelier du lundi 12 au vendredi 16 août (le 15 est un jour férié) (15 h 30–17 h 00)

- ・ Atelier Cinéma *Claire Mallet*
- ・ Atelier de découverte du Slam *José Shungu*

Atelier du lundi 19 au jeudi 22 août (15 h 30–17 h 00)

- ・ Atelier Cinéma *Claire Mallet*
- ・ Atelier d'écriture créative

Forums (15 h 30–17 h 00)

- ・ Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources
- ・ Le système scolaire en contexte européen
- ・ Utiliser la plateforme Moodle en classe de langue
- ・ Apprendre et enseigner avec TV 5 Monde
- ・ Mode d'emploi pour une pédagogie active
- ・ Besançon, ville d'art et d'histoire
- ・ Apprendre le français avec *Zigzag*, méthode de FLE pour enfants de 7 à 10 ans (CLE international 2012–2013)
- ・ Langue, culture et publicité
- ・ L'école, ici et ailleurs

- ・ Lecture et écoute simultanées. . . ou comment fixer chez les apprenants les structures de la langue
- ・ L'union Européenne, pourquoi? Comment? Quelle place dans le monde?
- ・ Victor Hugo d'hier à aujourd'hui : l'homme et ses combats dans sa maison natale à Besançon
- ・ L'art contemporain, la mode et le design en classe de FLE
- ・ Florilège des oeuvres du Musée des Beaux-Arts

モジュールは上記のような時間割で組まれている。その中から3つ選択することができ、私は *Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit*, *Enseigner avec les techniques dramatiques*, *Motiver les ados à travers une pédagogie active* というモジュールを選択した。アトリエの中から、*Slam* を選択した。

モジュールは、世界中で行われているフランス語授業の状況が反映されていると感じた。*Institut français* をはじめとする語学学校でフランス語を学ぶ人たちと、大学の第二外国語としてフランス語を学ぶ人、中学校、高校などの中等教育の枠組みの中で行われるフランス語の授業、または子供たちに教えるフランス語では、学習者の目的、動機はもちろんのこと、定められたカリキュラムを順守しなければならないなどの教授における制約も発生する場合もあるため、単に「フランス語の授業」と一括りにはできない。それぞれの先生の知識や経験、求めているものに応えるために、このような幅広いモジュールが用意されていたのだろう。

私は二年ほど語学学校でフランス語を教えているのと、2013年の4月から高校で教え始めたばかりという状況である。一つめのモジュールを選択した理由は、この語学学校での経験に基づく決定である。

語学学校では、学習者の動機はさまざまである。基本的にはモチベーションは高い人が多く、また必要に迫られている人も多い。とにかく「話せるようになりたい」という要望が圧倒的に多く、授業は学習者の発話量を授業時間の80パーセントになるように目指している。しかし私自身は、電子メールなどを使うことが日常である現在では「書く」というコミュニケーション方法も重要性が高いと考えている。フランス語を書くことに主眼をおいた授業をあまりしてこなかったので、話すことに主眼をおいた授業でも実践できるようないろいろな方法を学びたいと思った。そのために *Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit* というモジュ

ールを選択した。ここではただ単に「書く」作業をするだけではなく、このモジュールでは協同作業やグループワークを通じて、クラスメートと協力しながらフランス語を書くことを目的としているため、学習者たちのモチベーション維持にもつながるような具体例がたくさん紹介された。

Motiver les ados à travers une pédagogie active というモジュールを選んだのは高校での授業を念頭においてのことだった。高校でのフランス語の授業に関しては、二年生と三年生の二学年で、英語科の選択授業の一つとして割り当てられている。二年生に関しては初習外国語として、英語以外の外国語を知る、という目的が大きい。三年生に関しては、やはり大学受験に関係ない場合が多いため選択者は少なくなる傾向にあるらしいが、やはり英語以外の外国語として二年生で勉強したことを復習しながら、生徒同士で少しでもフランス語を使ってコミュニケーションを取り合えるように授業を進めているところである。このモジュールでは、10代の人たちを念頭においてフランス語をどのように教えるか、を考える機会として参加者は高校で教える先生が多かった。

Enseigner avec les techniques dramatiques というモジュールは、実は始めは選択していなかった。選択する時点では、シャンソンを扱うモジュールを選んでいただのだが、一度参加してみて考えを変えた。というのも私は大学生や大学院生のときにシャンソンを取り入れた授業をいくつか受講したことがあり、このモジュールでは戦後のフランスの歌謡の歴史から紹介するというスタイルだったので、もうすでに知っていることが多く、8回しかないということもあり、今回は新しいことを勉強したいと思ったため、変更させてもらった。*Enseigner avec les techniques dramatiques* では、担当の *Cormanski* 氏の提唱する身体を使ったフランス語学習法の中から、具体的な例を学ぶというものだ。大まかに言うと、ことばを発する際に体を動かしながら行くと、記憶に残りやすいということが挙げられるのだが、その準備段階として声、姿勢から作り上げるということや、ジェスチャーや表情を、発することばとリンクさせる練習方法はスタニスラフスキー理論などの演劇理論を取り入れていて、立つ姿勢や腹式呼吸から考える。フランス語に限らず、人前で話す機会を想定すれば、自分の考えを表現する方法として社会人のスキルとしても知っておくといいたいだろうと思えるポイントがたくさんあるだろう。そういった点から、どんな状況下でのフランス語授業でも実践できそ

うな練習方法を勉強できると考えて選択した。Slamは、詩の朗読と音楽的要素を組み合わせたようなものだ聞いたので、シャンソンの授業をやめたのでその代わりになるものと位置付けて選択した。自分自身でもフランス語で詩を創作したことはないし、韻や音節をよく知ることはフランス語を教えることにも役立つだろうと考えた。

1.1 Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit で学んだ具体例

この授業は「書く」ということに主眼をおいたもので、授業のなかでどのようにフランス語を書くということを扱ったらよいのかということ、たくさん具体的な例を用いながら教わった。クラスでは教科書を使って授業をしている人が多いと思うが、教科書の中にある練習問題をするだけでは足りないと思う場合、同じような練習問題をさらに用意するという手もあるが、違った方法で書く練習をする方法もあるはずだ。しかし実際には本に載っている練習問題を宿題にしたりする以外、授業内では書く作業をあまりしてこなかった。というのも私の中で書くことは一人でする作業のように思いこんでいて、自宅学習に充てることが多かったのだ。このモジュールでは毎回先生が用意してくれたものを研修生たちが実際体験するのだが、もちろんすべての例が自分のクラスでそのまま使えるというのではなく、各自がさらに工夫を加える必要もあるだろうし、またはそのアイデアをもとにして各自のクラスにあったアクティビティを創造する必要もあるだろう。しかし授業内でグループワークやペアワークを通してできる書く練習も工夫次第で可能だと学んだ。ここでいくつか具体的なものを紹介する。

①書き取りの練習

・レベル A1

・ペアワーク

・用意するもの→料理のレシピをペアの数の部数

まず、二人組のうちの一人がレシピを読む係になり、もう一人は書き取る係になる。パートナー同士は3メートルほど離れる。その離れた位置からレシピを読み上げ、もう一人はそれを書き取る。

・目的

読むほうは、隣にも読む係のひとがいるため、大きな声ではっきりと読まなくては自分のパートナーに届かない。そのためはっきりとフランス語を発音するという練習になる。また意味を考えながら区切って読まなければ相手に伝わりにくいということ

実感しながらフランス語を正しく読む練習ができる。また聞き取るほうは、離れているうえに他にも読み上げている人たちがいるためそういった他の音から自分のパートナーのことを拾いあげる努力が必要となり、集中して聞く練習になり、また相手を読むスピードに合わせて書き取ることも必要になる。聞き取れなかった部分も推測して書いてみる必要もあり、フランス語の音を文字にしていく練習ができる。

・まとめ

時間を区切ってこの練習を行えば、ゲーム感覚で楽しみながらでき、チーム同士で自然と競争意識も芽生え、チームワークが必要なのでクラスの雰囲気作りにも役立つ。最後に聞き取った人が自分の書いたものを読み、どれだけたくさん正しく書けたかを発表する。レシピの多くは動詞の命令形や原形、または二人称複数形の活用で書かれているため、過去形をまだ勉強していないクラスでも可能な練習である。注意する点は料理の専門用語がたくさん載っているものは避け、なるべく平易な表現で書かれたものを選ぶという工夫が必要である。料理のレシピを使うことで、文化的な側面を紹介しながら書く練習ができる。

②作文

・レベル A1

・2~4人ペアワークまたはグループワーク

・用意するもの→雑誌などから切り取ったたくさんの写真

まず準備段階として、生徒たちに家から雑誌や新聞などから切り取った写真をなるべくたくさん持ってくるように指示しておく。写真はどんなものでもよい。

持ってきてもらった写真を机の上に並べ、人物、物、風景などのカテゴリーに分ける。それぞれのグループ(またはペア)で、各カテゴリーから二枚ずつ写真を選ぶように指示する。グループ内でその選んだ写真をすべて使いながら話し合っって物語を作り上げ、その物語を文章にすることを指示する。

・目的

目的を知らないままに選んだ写真をもとに物語を考えていくので、チームワークを発揮して話し合わなければならないので、意見を言う、そして意見を聞くという練習になる。さらにそれを文章としてまとめなければならないので単語や文法の知識も必要になる。

・まとめ

出来上がった物語を発表する。そしてフランス語で正しく表現できているかを確認する。写真の数が足りなかった場合のために、教師のほうでも写真を用意しておくことよい。また、時間を区切って行うことも大切だろう。研修ではもちろんすべてフランス語で話し合いをしたが、クラスのレベルによっては、話し合いは日本語を使用してもよい、などのアレンジ、工夫が必要だろう。

このモジュールでは上記の二つの練習以外にも、たくさんの書く練習の具体例を体験させてもらった。今まで「書く」という勉強法は一人で行うものだというイメージがあったが、この授業を受けて、ペアやグループでもフランス語を書くという作業が楽しみながらできることを実感できた。

実際には語彙や文法のレベルによって、これらの練習がクラス内でできる環境にないところもたくさんあるだろうが、こういったアイデアを活かして授業内で実践していくことは可能だと考える。

1.2 Enseigner avec les techniques dramatiques で学んだ具体例

このモジュールは身体を使ってフランス語を教える方法を多く学んだ。研修生たちは椅子を車座に並べ、何も持たずに授業を受ける。まず体のストレッチから始まるこの授業は、始めフランス語を教えることと何も関係が無いように思え、不安になった。体のストレッチは声を出すために体をほぐすという目的で、さらに顔のストレッチはフランス語が唇をたくさん動かす言語だという観点から必要なもの、ということだった。たしかに言われてみれば教師の中には授業の前に発声練習や体のストレッチを行う人もいないかもしれない。しかし生徒の方はどうかというと、フランス語の授業のためにそんな準備体操をしてくる人はいないだろう。母語を話しているときはどんな言語だろうと、普段話すときには唇の動きや発声についてそれほど意識しないが、フランス語を話す準備としてこういった「準備体操」をするという発想は新鮮だった。子供のための外国語の授業では確かに音楽や歌に合わせて体を動かすという光景はよく見られる。そういったことを考えるとこの準備体操にも納得がいき、大事なことだと思えるようになった。このモジュールで紹介された練習方法のすべてに通じる基本的な流れは次の通りである。

1. faire 行う（ことばは発さない）
2. faire + dire 行う + 言う（1と同じ動きをことばで表現しながら同時に行う）
3. dire du faire 行いを言う（体は動かさず1の動きをことばのみで表現する）
4. écrire 最後に1の動きを文字で表現して確認する

①鏡

・レベル A1～A2

・ペアワーク

まず二人組を作ってもらい、片方は鏡の役になる。準備として場面設定として「朝の洗面所」を想像させる。朝起きて洗面所へ行き行くことをイメージさせておく。一人は普段自分が洗面所であることをパントマイムのように行う。パートナーは向かい合った状態でそれを忠実に真似していく。このときことばは発さない。例えば、水道の蛇口をひねる。顔を洗う。タオルを手に取り、顔を拭く。歯ブラシを手に取り、歯を磨く。髪の毛をセットする。さらに女性なら化粧をする、男性なら髭を剃るという行為が加わるだろう。もちろんあらかじめ決められた行動は無いため、人それぞれ違う順序で違う動きになる可能性がある。

次にもう一度同じ役割のまま同じ行動を繰り返す。しかし今度は同じ行為をしながら今自分がしていることをフランス語で言う。鏡役の人はパートナーが言うことをそのまま真似する。

最後に自分鏡の前でしたことを、体を動かさずに言ってみる。

・まとめ

朝の洗面所での行動は、自分の日常に密接した事柄をフランス語で表現するため、想像しやすく、また実際に自分がいつもやっていることを体で表現するため、特殊な体の動きを覚える必要もない。いつもの自分の慣れ親しんだ行動とともに練習することで記憶に残りやすい。顔を洗う。歯を磨く、髪の毛をセットする、といった行為は代名動詞を使う練習にもなる。さらに鏡役の人は、主語を二人称、三人称に変えて言ってみることで代名動詞の練習ができる。

②空港

・レベル A1

・ペアワーク

まず二人組を作り、場面設定を伝える。場所は空港で、一人が旅立つ人、一人が見送りに来た人にな

る。二人にそのつもりで簡単な会話をを行うように、指示する。旅立つ人は検査場に入り、ガラスの壁の向こうへ行ってしまうという設定にする。そこで旅立つ人が見送りに来た人に伝えなければならないことがあることを思い出し、ガラス越しにメッセージを伝えようとする。ガラス越しなので声は聞こえない。見送りに来た人はそのメッセージを口の動きから推測し、当てるといふゲームのような練習である。

・ポイント

メッセージは一文で、短いものにすること、と指示する。声は絶対に出さないように。そうするとメッセージを伝える方はどうするかという、自然と口を大きく動かす。これは articulation (調音、個々の音を明瞭に発音すること) の練習で、パートナーが「?」という仕草をすればするほど、より大きく口を動かしてなんとか伝えようと努力する。ちなみに私がこの練習を体験したときは、参加者の多くが二人称単数の命令形を使ったメッセージを発していたため、教科書で命令形を勉強したあとにやってみるといいのではないかとという提案があった。しかしこれは全員がフランス語教師なので、クラスのレベルによってはもちろん予想通りいかないだろう。私は、まだたくさんの語彙や知識を持っていない学習者の場合、メッセージを任意にするとなかなか当たらずに面白くない時にどうするかと考えた。事前に空港で別れ際にどんなメッセージが想定されるかをクラスで考え、それを共有、発音練習したうえで、その中から選ぶという形でもいいのではないかと考える。

1.3 Motiver les ados à travers une pédagogie active で学んだ具体例

このモジュールでは担当の先生が作ったテキストを参考資料にしながら、教科書の中でどのようなコンテンツが10代の学習者に有効であり、どのようなものが興味をひかないか、など教科書そのものの構成も吟味しながら、準備をしなければならないこと、教科書に掲載されているすべての練習問題をする必要はなくて、毎回その練習は目的に対して有効か、必要かを考えてしなければならないということを何度も考えさせられた。確かに教師は一度教科書を選ぶと、その教科書を順番にこなしていくことに専心してしまうことがある。それは自分で用意したプリントなどの配布物に関しても同じことだが、自分の思い入れが先に立って

しまうと、生徒はつまらなく感じて授業に集中できなくなる、ということらしい。特に10代の学習者においては興味の対象が自分を中心とした、狭い範囲に限られることが特徴で、教科書に出てくる「○○さんの一日」をフランス語で読む、といった授業内容では活発なフランス語学習は望めないだろうということだった。

また、板書の際の注意点として、男性名詞は黒や青、女性名詞は赤、などで色分けをし、一貫して常に書き続けることで、男性名詞と女性名詞というものに抵抗を覚えないようにするなどのアイデアは、中等教育の場に限らず取り入れられる工夫の一つである。こういったことを意識しながら授業準備をして、常にその授業の目的を念頭におきながら、教科書の流れに身を任せずに、教科書の内容を取捨選択しながら有意義な授業準備をしていきたい。このモジュールでは最初のアイスブレイキングが楽しく印象的だったので下記に記す。これはもちろん年度の初めにクラスの雰囲気づくりとして取り入れる場合が多いが、学期の途中でもクラスメート同士がよりよく分かり合える、またお互いにフランス語を使ってやり取りができるという点で有効なものだといえるため、いくつかの種類を知っておくといいだろうと思った。

クラスの雰囲気作りとして (アイスブレイキング)

クラス全員に紙を配り、自分が旅行に行くときに絶対に持っていくものをイラストで描いてもらう。文字は書かないこととする。それを回収したのち、シャッフルして一人一枚配る。(もちろん自分のものが当たった場合は誰かと交換する)。イラストを見て、描いた人を想像する。性別や年齢などは学校の場合あまり重要ではないが、いろんな年代や性別の人が集まる語学学校などではこの点もしっかりと想像してもらう。そして想像した人物像をフランス語で表現する。その後イラストをみんなに見せて、意見を求め、最後に本人が名乗り出て、なぜそのイラストを描いたのかを言ってもらう。旅行に絶対持っていくものは、人によって大きく差があるので、どうしてそれを持っているのかを聞くことは、その人自身をより知ることができると楽しみながら、お互い自分のことを語るきっかけになる。もちろん、研修ではみんなフランス語で行ったが、初心者でまだフランス語を知らない人の場合、日本語で行っても十分効果があるものだと考える。

アトリエとして私が選んだ Slam とは一種の詩の朗読であり、ラップなどの歌詞と同じように、韻を用いてさらにリズムに乗せて表現するものだそうだ。ブザンソン出身のアーティストの方が講師で、はじめに Slam の歴史を簡単に説明してもらったあと、実際に自分で詩を作る作業をしていった。このアトリエではいくつかのポイントとして、韻の種類や音節、小節、とはどんなものかを勉強しながら4日間で7つの課題が提示され、各授業の最後に自分の作品を読んでみて、先生のアドバイスをもらう。最終日には一番自身のある作品を選び、リズムをつけながら一人ずつみんなの前で朗読をした。ここに4日間の課題を紹介する。

勉強した主なもの：

rimes (rimes plates, rimes identiques, rimes croisées, rimes embrassées) mesure, boucle, vers, pieds, allitérations (succession de consonnes percussives)

課題 1

Présentation : rimes croisées

課題 2

Expression libre : rimes identiques

課題 3

Le soleil : rimes croisées, 4 vers, 6 pieds

課題 4

Inspiration : rimes identiques, 2 vers, 6 pieds

課題 5

Inspiration 2 : rimes embrassées, 4 vers, en utilisant la tâche numéro 4

課題 6

Expression libre : 2 vers, allitérations

課題 7

Il faut des mots fixés : théâtre, parents, découverte, rouge. rimes (au choix).

このアトリエではこのように、毎回題としていくつかの制約が提示され、それに従って詩作をしていったのだが、遊びの要素を含みつつもフランス語の音というものに深く迫っていかなければならず、大変勉強になった。初心者でも限られた語彙力の中で、韻を考えてみることができるだろう。また音節を数えながら単語を発音していく必要があるし、辞書で同じ韻の単語を探したりする作業は、楽しみながらフランス語の練習ができるヒントとして今後考えていきたい。

フォーラムは主に文化を紹介するものが多く、私もブザンソンの現代アート美術館を訪れた。ここではしっかりと課題が出され、自分の気に入った作品を一つ選び、その作品の紹介、感想を書いて、期日までに Moodle を使って先生に提出するというものだった。

このフォーラムは *Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit* のモジュールの一環だったので、モジュール内でも一度 Moodle を使った授業があった。自宅学習、またはフランス語をキーボードで打てるように練習するためのひとつの練習方法モデルとしてモジュールの中では、「長らく会っていない友達が太ってしまったので落ち込んでいます。励ましのメールを書きましょう。Il faut que を使って書くこと。」という課題が出され、クラス内でメールのやりとりをするというものだった。もちろん Il faut que を使うことで、接続法の練習をする目的も含まれている。

Moodle の環境が整っていない場所でも、メールを使って書く練習はフランス語をキーボードで打つという点において有効な練習方法だろう。日本語対応のキーボードなら、まず言語設定でフランス語（フランスやカナダなど）を加え、さらにキーボードの配置を覚えながらアクセント記号の位置などを知り、フランス語でメールを書くことに慣れることができる。

ま と め

このブザンソンでの研修に参加してみて、普段の自分のしている授業の準備のしかたが大きく変わった。今はまだとても時間がかかるが毎回の授業準備をていねいに、そして自問し続けながら、学習者のことを考えて授業を組み立てていくことが大切だということを痛感している。

ここで紹介した具体的な練習方法はほんの一部であり、私が実際に使ってみたくらいのものを選んだ。しかし参加者たちからの意見にも数多くみられたが、そのまま実践することができないクラスもある。その場合でも「自分のクラスでは無理だ」と簡単に切り捨ててしまうのではなく、それが授業の、そして学習者の目的のために良さそうだと思うのなら、どのように工夫すれば実践できるのかを考えることが大切だといえる。そして考えるだけでは何も始まらないので、実践することと実践したあとにしっかりと検証することが必要だ。

とくに FLE はフランスで考えられたものであり、CECR（ヨーロッパ共通参照枠）に基づいた評価基準に従っている。これもまたヨーロッパで作られたもの

なので、日本におけるフランス語教育を考えたときにそのまま当てはめられるものではないということは現場の教師たちは感じていることだと思う。自分のフランス語を教える環境をしっかりと客観的に捉え、そのなかで何ができて、何ができないのかを見極め、できることは試してみる。ということを繰り返すなかで、常に自分なりの工夫をしながら毎回全力で授業ができるようにしていきたい。今現在、ブザンソンで学んだ具体的な練習方法を早速授業で実践しているのだが、まだ検証段階に近く、その報告はまた別の機会にさせ

ていただきたいと考えている。

この研修で、他の参加者と休み時間や昼休みに情報交換をしたり、自分が出られなかったモジュールの内容を教えてもらったり、自分の出ているモジュールを紹介したり、活発に意見交換ができたことはとても良い経験だった。このような世界中のフランス語を教えている人たちとの出会いは、自分の視野を広げ、多くの新しい発見があったものとして本当に貴重なもので、これからもお互い切磋琢磨しながらフランス語教育について語り合っていきたい。